

あつぎ

農委だより

2021年
8月1日
第88号
編集・発行
厚木市農業委員会



「きれいな花を贈ること、身のまわりに飾ることで、
幸せな気持ちになってもらいたい」
そんな気持ちで育てています。

(2面・3面)

「癒やし」と「潤い」を 一輪の花で生活に

連日花の収穫作業を行っているのは、大貫農園を営む大貫亘さん(62)。父の栄一さん(90)と従業員で、約25品種のカーネーションを手掛けています。

栄一さんが約3300平方メートルの規模で始めた農園は、現在5000平方メートル以上に拡大。会社勤めをしていた亘さんが後継者となったのは30年ほど前。近代的な温室では、常に6万株もの色鮮やかなカーネーションが栽培され、年間の出荷本数は約45万本にもなります。



従業員と摘み取ったカーネーションの選別をする大貫さん

早朝からの摘み取り

花き農家の朝は早く、大貫農園でも5時には温室での作業が始まります。

人の背丈ほどに育ったカーネーションは、はさみで1本1本丁寧に摘み取られます。品質や茎の長さを確認しながら下葉を取り、規定の本数に束ね、水につけ鮮度を保ちながら出荷に備えます。

主な出荷先は、市内の南関東花き園芸卸売市場。週3回の競りの前日夕方5時ごろに出荷します。店頭に並ぶまでは約3日かかりますが、その期間を考慮し、花の咲き具合、つぼみの状態を見極めながら収穫するという工夫です。

品種選び

カーネーションは多年草で1年中収穫できますが、高温多湿が苦手です。特に、高温の場合はきれいな花が咲きません。

そのため、苗の植え付けは6月から7月にかけて行われ、暑い時期の収穫は避けています。

お家時間に彩りを

いまだに収束しない新型コロナウイルス感染症。卒業式や送別会、結婚式など、たくさんのお花が彩りを添えるイベントやパーティーの中止が続いています。

こうした影響により需要が減少し、花き業界全体では売上が落ちています。しかしながら、新しい生活様式、お家時間が定着し、家族や友人同士で花を贈る機会が増えており、自宅で花を楽しむ人もも多くなっているそうです。

「コロナ禍で大変な時期だからこそ、可憐に咲く花を見て心を和ませてほしい」と亘さん。

育ち具合を確かめながらカーネーションを摘み取る姿は優しさにあふれています。

今こそ始めよう。花のある暮らし。

カーネーションに魅せられて



色鮮やかなラスカルピンク

戸田の杉山園芸では、約3600平方メートルの温室でカーネーションが栽培されています。両親とともに杉山園芸を経営するのは、杉山幹夫さん(58)。毎年約35万本のカーネーションを出荷しています。

カーネーションは「母の日」を連想させますが、その花の色の多さから、誕生日など様々なイベントで使われることも多く、キキヤバラと並び日本三大切り花と呼ばれています。

多様な花色

毎年約20品種を栽培しています。今年、美しいピンク色のラスカルピンク、淡い緑色が特徴のグリーンシャワーなど、31品種3万株の栽培に取り組んでいます。

父の背中を見て 花き農家に

父の進さん(84)がカーネーションの栽培を始めたのは、1958年。幹夫さんが物心ついたときには、すでにカーネーションを栽培しており、幼いころは、温室の中



真剣な表情でカーネーションの生育を確認する杉山さん

仲間とともに

市内にはカーネーションをはじめ、バラやシクラメン、ポインセチアなど、多くの花き農家があります。

多くの仲間がいる市園芸協会の活動にも積極的に参加し「花は人に笑顔と安らぎを与える」ことを再認識しました。

協会での意見交換では、栽培に関することから販売に関するまで、得られる情報はすべて集め、自身のカーネーション栽培に生かしてきました。

現在では、県花き園芸組合連合会カーネ

長く楽しめるバラを届けたい



摘み取ったバラを手にする内田さん

下津古久にお住まいの内田博夫さん(72)は、約1000平方メートルの硬質フィルムハウスでバラの栽培をしています。

深紅色の「サムライ」、大輪の「アバランチエ」、色鮮やかな「プロックサムピンク」など、7品種のバラを栽培。主に南関東花き園芸卸売市場に出荷するほか、自宅で直売も行っていきます。

イチゴ農家から バラ農家へ

内田さんの両親はイチゴ農家でした。農家を継ぐため、平塚農業高校に進学し、そこでバラの温室栽培技術に出会い、卒業後はバラ農家になることを決意。両親と話し合ってから栽培を始めたのは、1968年。当時としては最新鋭のガラス温室を建て、内田さんはバラ農家としての一歩を踏み出しました。

品質向上に向けて

ハウス内の温度やCO2濃度、湿度などのデータをスマートフォンでモニタリングし、栽培管理に生かしています。

さらに、剪定ばさみの洗浄や摘み取ったバラの切り口に抗菌作用のある前処理剤に浸すなど、ハウス内はもちろん、作業場での衛生管理にも気を配ります。

こうした努力によって、(二社)日本花き生産協会が認証する日持ち性向上生産管理基準をクリア。「日持ちさん認証マーク」を出荷するバラに表示しています。



出荷を待つ認証マーク入りのバラ



出荷作業を行う内田さん

消費者に喜んでもらえるよう、1日でも長く楽しめるバラ生産に取り組んでいます。

人を笑顔にするバラ

「バラの花束を受け取った人は、必ず笑顔になる」と内田さんは語ります。

新型コロナウイルス感染症の収束はまだ見えませんが、家族の誕生日や恋人との記念日といった特別な日はもちろん、何気ない普段の日に、家族や友人へバラの花束をプレゼントしてはいかがでしょうか。

花のある暮らし。

女性 農業者 父の遺志を継いで

小野にお住まいの宮沢伶奈さん(29)は、農家としての自立を目指し、日々勉強中です。

約2万平方メートルの農地で水稲、野菜を栽培していた専業農家の父が亡くなったため、会社を退職し、今年から、祖母とともに毎日農地に出ています。

「父は祖母とともに農業を営んでおり、地元でも規模の大きな農家でした。農業を手伝おうと思っていた矢先、突然他界してしまい、いろいろ悩んだ末、父が耕した田畑で農業を継ぐことを決意しました。」

しかし、宮沢さんは農業の経験



田植機を運転し、いざ、スタート!

鷺尾小5年生の米づくり体験

鷺尾小学校では、毎年5年生が総合的な学習の時間に米づくりを体験しています。

この日は代かき体験。地元の農家、小野晴巳さん(62)の指導の下、JA荻野支所の職員のパックアップで作業開始です。

子どもたちは自分たちの足で土と水を混ぜ、代かき作業を行います。田んぼに入ったことのある子どもはほとんどいません。

「きゃー」「なんか気持ち悪い」「転びそう!」...元気な声が飛び交います。悪戦苦闘の末、何とか代かきできました。

約2週間後、いよいよ田植えの体験です。

小野さんに苗の持ち方や植え方を教えてもらった子どもたちは、積極的に田んぼに入ります。足がとられる上、慣れない体勢での作業は大変です。



教えてもらったとおり苗を植えていく子どもたち

およそ2時間後、JA職員の手も借り、予定していた200平方メートルの田植えが無事終了しました。

「最初は田んぼに入るのが嫌だったけれど、泥が足にくっつくのが楽しかった。」「本当にお米が採れるかちょっと心配」。不安もありましたが、米づくりの楽しさを体験できたようです。

この後は、10月の稲刈り、11月の脱穀体験が待っています。自分たちが育てたお米は、どんな味かするんでしょね。

集約化された 関口地区の水田

一面の水田が広がる関口の座架依橋南側では、昨年11月ごろから関口土地区画整備組合による重機を用いたコンクリート畦畔の除去が行われていました。

米作農家の地権者30人が集まり、約4年間の話し合いの末、農地の集約化に向けた組合が設立したのは、昨年の7月のこと。

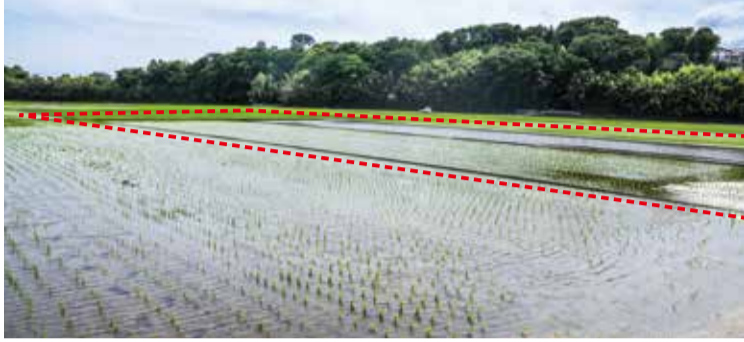
この周辺は、大正初期に耕地整理が行われ、手作業での耕作に適した約700平方メートルの水田が多くあります。耕地整理から約100年が経過した現在、相続等により所有農地が分散してしまいま

した。田植えから除草、稲刈りまでが機械により作業ができる便利な時代ですが、耕作地間の移動は農家の負担となつていきます。

こうした問題を解決するため、高部智さん(80)と山田昭久さん(86)などが中心となり、集約化に向けた話し合いが始まったのです。

30人の組合員が耕作している水田はおおよそ130枚。それぞれの所有地を地図に落とし込み、どのように集約するか検討しました。

「畦畔を取り払えば、もっと作業効率は良くなる」とい



畦畔除去前



畦畔除去後



山田さん(左)と高部さん

う思いを胸に何度か話し合いを重ねられ、3枚の水田を1枚に集約することに方針が決定しました。高部さんは「集約することには賛成の声が多かったが、皆が納得する形で集約していく作業が大変だった」と語ります。

こうして農閑期である11月から3月の間に組合員自らが重機を操作し、畦畔除去作業が行われたのです。そして6月、集約後初めての田植えが行われました。もちろん、作業時間は格段に短縮。

山田さんは「田植え機の乗り入れにも耕作地の移動にも時間がかかっていた。この時間がなくなつたうえに燃料代も節約できた」と胸を張ります。

組合長で、農地利用最適化推進委員でもある楠好文さん(70)は、「水田の集約について地域で話し合ったことで、仲間意識がより強くなった。耕作しやすくなったことで、次代に農業経営を引き継ぐ不安も軽減された」とメリツトの多さを語ってくれました。

市内大学紹介②

東京農業大学・生物資源開発学科 「生物多様性の保全と農林業」

船子にある東京農業大学厚木キャンパス。以前は大学の実習農場でしたが、1998年に厚木キャンパスとして生まれ変わりました。

東京農大では、食料生産としての農林業や畜産に関することはもちろん、自然環境との共生、地域再生といった分野での取組も行われています。

近年、「生物多様性の保全」という言葉をよく耳にします。生態系のバランスが保たれることは、気候の安定、水質保全、植物の生育に適した土壌形成につながり、農林水産物の安定した生産などに結びつくと考えられています。

厚木キャンパスの「生物資源開発学科」では、多くの学生が生物多様性の保全について学んでいます。生物多様性と農林業の関係について、学科長の松林尚志教授にお話を伺いました。

「生物多様性の保全は、農林業とは切り離せないものであるとともに、私たちの暮らしを豊かにする要因の一つです。農家の高齢化や後継者不足による、耕作放棄地の増加等に伴い、獣害や自然環境の悪化を加速させてい



松林尚志教授

ます」。最近では、中荻野のあつぎこどもの森公園で、「あつぎこどもの森クラブ」と協働し、里山管理実習を行っていています。内容はヨシの伐採や抜根、開墾畑の拡張、ため池の水生物調査などです。『現場での作業を通じて、生物多様性の保全を理解し、農林業にも興味を持つ若者が増えるお手伝いができればと思っています』。



ヨシの抜根をする学生と「あつぎこどもの森クラブ」のスタッフ



「あつぎこどもの森クラブ」のスタッフの説明を受ける学生たち

農地の利用状況調査(農地パトロール)を行います

遊休農地や遊休化のおそれがある農地を把握するため、8月から9月にかけて利用状況調査を行います。調査に当たっては、農業委員・推進委員が農地内に立ち入ることや、利用状況等について直接お尋ねすることがあります。

調査の結果、遊休農地と判断された農地所有者の方に、利用意向調査票をお送りします。利用意向をご記入の上、農業委員会事務局へご返送ください。

問 農業委員会事務局 ☎225-2480

～畦畔撤去(区画整備)を終えて～ 農地利用最適化推進委員 楠好文

今回の畦畔撤去(区画整備)で、山田昭久さんと高部智さんの、関口における水田耕作への熱い情熱を感じました。将来、担い手が不足するかもしれないという危機感がこの情熱を生んだものと思います。

区画を広大化することは、現在の耕作者である私たちの効率的な経営に必要なことであるとともに、次世代の耕作者が安心して農業経営を行うためにも必要なものと考えました。

今回整備しようとした区域内の水田所有者に働きかけたところ、9割以上の方の賛同を得ることができました。コロナ禍で説明会の開催ができないなど、苦労もありましたが、お二人が地権者を訪問することで了解を得ることができ、組合員が納得する整備が完了しました。

ご協力いただいた皆様に感謝いたします。

国が定める 安心が大きい

担い手積立年金

- 1 農業に従事されている方は誰でも加入できます
- 2 保険料は自分で選べ、いつでも見直せます
- 3 税制面で大きな優遇措置があります

詳しくは…
農業者年金基金 検索 <https://www.nounen.go.jp>
手続は、JAあつぎ本所・各支所または農業委員会事務局へ

全国農業新聞

NATIONAL AGRICULTURAL NEWS